

# 中世北イタリア《準都市》共同体の形成と発展

——カザーレ・モンフェラートと在地紛争——

佐藤 公美

【要約】 ルネサンス期北イタリアにおいては、領域的国家秩序を構成する政治的主体として多数の有力農村部共同体が出現し、国制に際立った特徴を与えている。本稿は近年《準都市 *Quasi città*》として注目されているこれら共同体の一事例としてカザーレ・モンフェラートを取り上げ、その共同体形成過程を在地紛争との関連において考察したものである。共同体規約及び近隣集落や君侯との交渉記録は、この共同体が内外の平和秩序を主体的に担う組織と実力を発達させていたことを示している。このような実力は、当時の広範な間都市的党派抗争を受けた農村部における抗争の展開と、その結果としての集落の合併と拡大をもとに発達した。そしてこのような紛争の担い手であった在地農村小貴族らが指導層として結集することになる。この《準都市》農村共同体は、一二・三世紀に特有の都市・農村関係に起因する定住史的状况および紛争状況の中で生み出され、発展したのである。

史料 八九巻二号 二〇〇六年三月

## はじめに

一般に近年の西洋中世史研究においては、各国の領域国家形成過程における貴族や共同体間の共通の利害の追求や広域的な平和創出のための共同行為という、君主による上からの統治行為とは異なる、いわば水平的な関係に基づく契機の意義が益々強く認識されるに至っている<sup>①</sup>。日本においてもこのような方向性を持つ研究の発展に大きな影響を与えたP・ブ

リックレは、近世領邦形成の契機として共同体を基盤とした国制に光をあて、「共同体主義」概念を提出した。その主要な対象地域はイタリアのアルプス渓谷を南限とし、ティロルおよびスイスを中心とする中南欧地域であり、ドイツ語圏の中でも特に共同体主義の発達した地域においては、貴族支配の欠如や直轄領であるが故の君主との直接の関係などがその基盤をなしていた。いずれにせよ、国制上の共同体主義発達の前提は古典荘園（ヴィリカチオン）の解体と、国家的機能を持つ隣人団体としての共同体（ゲマインデ）の形成、およびそれらの領邦君主との直接的関係の形成であり、それによるラント法と荘園法の法域の相互浸透であった。ここにおいてリックレは、中世領域国家をラント法共同体と考えるO・ブルンナーのテーゼに基づきながら、荘園法のラント法への統合が、論理的必然として共同体を媒介とした平民の代表性の出現をもたらすと結論するのである<sup>②</sup>。

このことが暗黙の内に示しているのは次のようなことであると筆者は考える。古典荘園の解体や共同体Ⅱ隣人団体の形成という、いわば在地社会における普遍的な社会史の変動と再編成の帰結が、ラント法や領邦君主という、領域国家、つまりより広域的な政治社会の水準における既存の構造を支える特殊要素と接合し、それらに変化をもたらすことによって生まれたものが中世末期領域国家なのであるということ、従って各地の在地社会と広域社会の前提条件をなす領域構造や権力構造とその変質過程、及び両者の接合過程の比較研究が中近世領域国家、およびその形成・発展過程において見られる諸現象の史的意義を明確にする上で不可欠だということである。

本稿は、このような視角に基づく地域研究の中の一要素を構成しようとするものである。筆者は前稿において、一二・一三世紀ローマ時代北部イタリアのロンバルディア及びピエモンテにおいて、都市を中心とした諸自治共同体の間で、いかにして複数の都市間に広域的な秩序創出が試みられたかを検討した。その結果、この地域の諸都市は都市間紛争を仲裁制によって解決する秩序形成システムを発達させ、共有していたことが示されたが、これはいわば、続くルネサンス期に発達する地域国家 *Stato regionale* の前提条件をなすものであると同時に、中世盛期中北部イタリアの都市ローマ

(Ⅱ自治共同体) 世界の原理を反映するものであると言えよう。

周知のように、都市コミュニエ世界における領域的権力構造の最大の鍵は都市・農村関係である。中世イタリア都市・農村関係の最も古典的な理解に従えば、農村部は集団領主である都市国家の支配領域Ⅱ「コンタード」であり、独自の秩序形成機能や対外的行為能力を持たないとされる。だがこのような都市・農村関係の理解は、各都市の「コンタード征服」事業の進捗や完成度の多様性、及び事実多数存在した自治的農村共同体や都市の支配を免れた農村領主支配の実態の解明を受けて久しく批判されている。又、これらの農村共同体の中には、ルネサンス期地域国家の中で高度な自治を承認され、その体制内で重要な役割を果たしたものが多数あったことも指摘されている。<sup>⑤</sup>

ルネサンス期地域国家を都市コミュニエ期からの都市・農村双方を含む領域的再編成の帰結として捉え、その構造理解において、都市を中心としつつも自治的共同体や領主支配の重要性を否定し得ないものにしたのはG・キットリーニの研究である。<sup>⑥</sup>しかしその後の個別事例研究の量は十分ではなく、その本質的意義に関する共通見解は形成途上であると言えよう。いずれにせよ、先述のような在地社会と広域社会との接合の過程を問題にするためには、コミュニエ期からの移行過程における動態の理解が不可欠である。

同時期の都市・農村関係の再考において、近年イタリアの研究では、G・キットリーニによって提唱された、このような農村集落の一部を指す《準都市 *Quasi città*》という概念が注目されている。<sup>⑦</sup>《準都市》は、集落規模、人口、住民構成、経済的・政治的中心地機能の点から見れば、アルプス以北の「都市」に匹敵するような、イタリアの農村集落を指す。このような集落が「都市 *città*」と呼ばれ得ないのは、イタリアにおいては司教座のみが「都市」としての地位を承認されるため、それ以外はすべて「農村」に分類されるからである。従って法的分類に制約されない地域的現実においては、農村部の共同体が都市同様の行為能力を持つことは十分に可能であると言えよう。日本でも早期にイタリア農村部集落の多様性を指摘した清水廣一郎氏は、このような集落を「農村都市」と呼んで都市支配に完全に服した小規模な集落から区

別し、そのような領域に強力な社会集団が形成された時に大きな実力をもちうる可能性を指摘していた。<sup>⑧</sup>

では具体的に、その形成過程と内実は如何なるものだったのか。《準都市》はおよそ史料上 *borgo*（ラテン語では *Burgus*）と呼ばれ、集住度が高く、経済的役割や人口規模において特別な重要性を持つ集落を指すが、その定住史的及び共同体的発展過程は、紀元千年後の農村人口の増大と農民のモビリティの高まりによる、農村集落の集中・拡大や新村の形成と背景を等しくしている。

定住史及び新村研究に関しては、過去半世紀のイタリア中世史研究は、大きな蓄積を持っている。P・トゥベールのインカステラメント *incastellamento* 研究をはじめ、各地の事例に沿った集落の城塞化、定住再編成、新村建設等の研究業績の発表が一九七〇年代から二〇〇〇年代にかけて相次ぎ、その長期的な過程や地理的構造、住民構成、要因等が明らかにされた。とりわけG・ファゾーリの研究を出発点として、A・A・セツティア、R・コンバ、F・パネーロらによる北部イタリアでの研究の進展は著しい。<sup>⑩</sup> これらの研究は、インカステラメントⅡ小定住の集中と城塞化や新村建設を含む定住再編過程は、北部イタリアにおいてはトゥベールがラツィオ州において指摘した一〇世紀から一一世紀を超えて長期的に継続したことを指摘し、同時にその要因も、外民族の侵入などの要因を超えて、効率的農村部支配と領域政策のための殖民、敵対封建領主からの支配民の引き抜き、戦時の住民への安全保障といった、コミュニネ時代の領域政策や都市間戦争、党派抗争の拡大に影響を受けたものであったことを明らかにした。

従って、一一世紀以降、コミュニネ時代を経て進行する農村部集落の形成・発展過程およびそこから誕生する各種農村共同体とそれの相互関係は、領域構造と政治史の密接な関係と、都市コミュニネをはじめとする局地的共同体から広域的政治秩序が生み出される過程とを反映していると言えるのではないだろうか。

ここでとりわけ興味深いと思われるのは、都市間戦争及び党派抗争の拡大との関係である。周知のように、諸自治コミュニネをグェルフィ・ギベリーニの両派に分けて展開した党派抗争による混乱は、中世盛期中北部イタリアの第一の特徴

をなしており、またその位置付けはコムーネ期からルネサンス期へ至るイタリア史の理解を根本的に左右して来た。<sup>⑭</sup>従って、農村部における定住史的再編過程にその役割を確認できるということは、抗争の研究が、都市・農村の全体における領域的再編成<sup>⑮</sup>がルネサンス地域国家を生み出す過程を在地社会の水準で理解し、同水準での比較に供する可能性を提供しているということを意味している。

本稿が目的とするところは、このような認識の上に立ち、戦争・紛争の拡大との関連において、『準都市』と呼ぶうる都市的な自治的農村集落の成長と発展を、その共同体的側面及びその行為能力から検討し、その基盤を考察することである。

そもそもコムーネ時代イタリアの農村は、なんらかの形で大小の戦争や紛争に参加する軍事的主体として当時の状況に関与していた。新村建設はしばしば軍事的目的を伴い、殖民する農民は防衛と従軍の義務を負い、常に潜在的な武力を持っていた。<sup>⑯</sup>また通常の都市間戦争においても、コムーネ時代には貴族の騎馬隊の他に、敵領域の破壊専門に編成された農民部隊が設けられていた。<sup>⑰</sup>騎士とともに従軍する楯持ちも通常農民であるが、彼らは楯持ち封を受け取る「事実上の騎士」であり、在地の小貴族とともに下層騎士として農村部に定住し、農村共同体の一部をなした。<sup>⑱</sup>このように農民は支配都市や封建領主の下で、戦争と報復のメカニズムの中に既に組み込まれていたが、その同じ武力が「農民フエーデ」の中で近隣の農村共同体相互間で用いられることもあり、その際の防衛上の必要も城塞化の要因の一つをなしたとA・A・セッティアは述べている。<sup>⑲</sup>このような状況の下で新村・拡大村が生まれ、多様な出自の新人口が流入したという事実は、農村部における対立抗争の複雑化と拡大、およびその解決という課題に新共同体が直面したことを想像させる。

新村の形成、または既存の集落の拡大過程においては、しばしば複数の集落の集合や、周辺小村の中心的集落への吸収合併が見られる。先行の新村研究からは、しかし集合以前の旧集落の集団としてのまとまりが失われる訳ではなく、新集落の内部に長期的に互いに異質な要素が混在し続ける例が多数あったことが知られている。<sup>⑳</sup>このような新村や拡大村が、

一二世紀から一四世紀にかけての党派や都市間の戦争と抗争の最盛期に継続的に誕生し続けていたという事実は、共同体の秩序の形成と維持、および諸共同体間の関係についての問題を投げかける。

そこで本稿では、複数集落の集合による新共同体の形成を経験した、自治的農村共同体の紛争の具体相を検討し、その行為能力を生み出す共同体的発展との関連を考察したい。本稿が扱う検討対象は、ピエモンテの都市的農村集落、カザールとその周辺である。この集落には一一世紀から一四世紀までを覆う聖堂参事会の文書群に加え、同時期の他の都市との関係上作成された文書や、皇帝発給文書が残されている。<sup>②③</sup>さらに、カザールは後に一四七四年都市に昇格され、モンフェラート侯国の首都としての地位を獲得するため、B・サンジョルジョによって一六世紀に作成された年代記においても多くの記述が割かれている。<sup>②④</sup>カザールにおいては、これらの史料によって、農村の日常生活に関わる極めて小規模な紛争や係争から、モンフェラート侯やミラノのヴィスコンティ家による領域国家形成を巡る戦いまで、多様なレベルの争いの連続を見る事が可能である。

カザールは都市への昇格およびモンフェラート侯国の首都化によって、一五世紀後半以降に都市としての急速な発展を経験したため、地域史研究においては、モンフェラート侯国の発展および候の上からの介入との関連において、特に地誌的関心からなされた研究が若干見られる。<sup>②⑤</sup>一方、中世初期以来の発展を検討し、共同体制度の発展という側面も含めて考察したものにはA・A・セッティアの研究がある。<sup>②⑥</sup>セッティアはその中において、カザールの自治能力の発展をも考察しているが、都市構造の上でも発展の跡を示す一三世紀中葉を一つの転換点と見ている。<sup>②⑦</sup>このような地誌的及び共同体制度的発展は、地域の紛争社会史とどのような関連をもつて展開したのだろうか。

農村部定住の再編成はヨーロッパ各地の中世盛期におよそ共通の現象であり、それと各地域に独自の政治史的・社会史的問題との相互連関の理解を基にすれば、国家的広域的政治秩序形成過程の比較考察を行うことが可能であろう。近年日本の西洋史研究においては服部良久氏が中近世紛争研究を通じて、地域共同体における紛争と政治的行為能力の関連を論

② じており、紛争と平和の展開と国家的発展の関連をヨーロッパに限定せず比較史的に考察する可能性が望まれている。中世初期における領域君主の不在ゆえに、下からの構造変化、地域的現実から広域的秩序への展望が鮮やかに示され得る北部イタリアにおける事例は、その有効な素材でもあり得るだろう。

以下第一章では、地域史や郷土史研究の助けを得ながら、まずは集落および共同体としてのカザーレの形成と発展の概略をまとめ、その問題点を浮かび上がらせることにしたい。

- ① Blicke, P., *Kommunalismus, Parlamentarismus, Republikanismus*, in: *Historische Zeitschrift* 242, 1986, pp. 529-556; Reynolds, S., *Kingdoms and Communities in Western Europe 900-1300*, 1984, p. フリッケ著、服部良久訳『ドイツの臣民——平民・共同体・国家二二〇〇—一八〇〇年』ミネルヴァ書房、一九九〇年。服部良久『ドイツ中世の領邦と貴族』創文社、一九九八年。
- ② P. フリッケ『「メーセン」臣民』。
- ③ 拙稿「ローネと広域秩序——一二・三世紀ロムバルディア・コンメンテの都市間仲裁制——」『史料』八三巻五号、二〇〇〇年九月、六六—一〇二頁。
- ④ Chittolini, G., *La formazione dello stato regionale e le istituzioni del contado. secoli 14-15*, Torino, 1979; ID., *Città, comunità e feudi negli stati dell'Italia centro-settentrionale (XIV-XV secolo)*, Milano 1996; ID., Alcune considerazioni sulla storia politico-istituzionale del tardo Medioevo: alle origini degli "stati regionali", in: *Annali dell'Istituto storico italo-germanico in Trento* 2, Bologna 1976; ID., The Italian City-State and Its Territory, in: A. Molho/ K. Raftaub/ J. Enlen/ A. Arbor (ed.), *City States in classical antiquity and medieval Italy: Athens and Rome, Florence and Venice*, 1991.
- ⑤ Chittolini, G., *Città, comunità e feudi*, op. cit. 時代は下がるが、近世のトスカナに関する次の研究も参考にされたい。斎藤寛海「トスカナ大公国の領域構造—コジモ一世時代—」『信州大学教育学部紀要』九〇、一九九七年、七一—八二頁。
- ⑥ Chittolini, G., *La formazione*, op. cit.
- ⑦ Chittolini, G., 《Quasi città》. Borghi e terre in area lombarda nel tardo Medioevo, in: G. Chittolini (a cura di), *Memoriosi di un borgo. Vigevano in età visconteo-forzese*, Milano 1992, pp. 7-30. (現在共同著者) 掲書 *Città comunità e feudi* (譯)
- ⑧ 清水廣一郎「一四世紀トスカナの農村ローネ」同『イタリア中世都市国家研究』岩波書店、一九七五年、一二七—一八六頁。また以下の論文も参照。中山明子「ロムターマ(都市の周辺領域)内部の多様性について(A. Barlucchino 著作に基づいて)——一二—一四世紀におけるシエナ領内アシャーノ(Asciano)の例」『京都芸術短期大学「瓜生」』第三号、一九九九年、一四九—一五七頁。拙稿「中世イタリアにおける領域構造論、及び都市—農村関係の課題」『史料』八二巻三号、一九九九年、一三二—一五一頁。
- ⑨ Chiappa Mauri, L., *Terra e uomini nella Lombardia medievale*, Roma 1997, pp. 7-9; Fossati, M./ Ceresatto, A., *La Lombardia alla*

- ricerca d'uno Stato, in: G. Andenna/ R. Bordon/ F. Sommarin/ M. Vallerani (a cura di), *Comuni e signorie nell'Italia settentrionale: la Lombardia* (Storia d'Italia 6), Torino 1998, pp. 483-572, esp. 524-525.
- ㉔ Toubert, P., Le structures du Latium médiéval. Le Latium méridional et la Sabine du IX<sup>e</sup> à la fin du XII<sup>e</sup> siècle, Rome 1973.
- ㉕ Fasoli, G., Ricerche sui borghi franchi dell'alta Italia, in: *Rivista di storia del diritto italiano* 1942, pp. 139-214.
- ㉖ Settia, A.A., *Castelli e villaggi nell'Italia padana. Popolamento, potere e sicurezza tra IX e XIII secolo*, Napoli 1984, ID., Chiese, strade e fortezze nell'Italia medievale (Italia sacra 46), Roma 1991, ID., «Villam circa castrum restringere»: migrazioni e accentramento di abitati sulla collina torinese nel basso medioevo, in: *Quaderni storici* 1973, pp. 905-944; ID., Le pedine e la scacchiera: iniziative di popolamento nel secolo XII, in: *Rivista storica italiana* 1991, pp. 633-656; ID., Zone «strategiche» e borghi nuovi. Aspetti della guerra nell'età comunale, in: *Studi storici* 1990, pp. 983-997; Comba, R., Testimonianze sull'uso dell'incollo sul dissodamento e sul popolamento nel piemonte meridionale (XIII-XIV secolo), in: *«Bollettino storico bibliografico subalpino»* (CSP-BSBS) 1970, pp. 415-453; ID., *«Villae» e borghi nuovi nell'Italia del nord (XII-XIV secolo)*, in: *«Studi storici»* 1991, pp. 5-23; F. Panero, *Villanove medievali nell'Italia nord-occidentale*, Torino 2004; Comba, R. / Panero, F. / Pinto, G. (a cura di), *Borghi nuovi e borghi franchi. Nel processo di costruzione dei distretti comunali nell'Italia centro-settentrionale (secoli XII-XIV)*, Cherasco-Cuneo, 2002; Andenna, G., *Storia della Lombardia medievale*, Torino 1998; 城戸昌孝「ベンハース ティンメン・集村化・都市」江川 曜「服部良久編」『図説中世史 [中] 成長と飽和』マネルヴァ書房。
- ㉗ 佐藤眞典「中世イタリア都市国家成立史研究」マネルヴァ書房 二〇〇一年。
- ㉘ 輝世ロムーネの衰退からルネサンス国家の出現に至る古典的研究史の経緯について Chittolini, G., La crisi della libertà comunale e le origini dello stato territoriale, in: *«Rivista storica italiana»* 1970, pp. 99-120 (戦後史研究 45 輝世の形成と発展)。
- ㉙ Chittolini, G., Introduzione in: *Formazione*, op.cit., pp. VII-XI.
- ㊀ Panero, F., op.cit., pp. 63-77.
- ㊁ Settia, A.A., *Rapine, asedi, battaglie. La guerra nel medioevo*, Roma-Bari, 2002, p. 54; Menant, F., Gli scudieri («scieri»), vassalli rurali dell'Italia del Nord nel XII secolo, in: ID., *Lombardia feudale. Studi sull'aristocrazia padana nei secoli X-XIII*, Milano 1994, pp. 281-283.
- ㊂ Menant, F., op.cit. ID., *Campagne Lombardes du Moyen Âge. L'économie et la société rurales dans la région de Bergame, de Crème et de Brescia du X<sup>e</sup> au XIII<sup>e</sup> siècle*, Roma 1993, pp. 690-697; Keller, H., Adel, Rittersium und Ritterstand nach italienischen Zeugnissen des 11.-12. Jahrhunderts, in: *Institutionen, Kultur und Gesellschaft in Mittelalter. Festschrift für Josef Fleckenstein zu seinen 65. Geburtstagen*, Sigmaringen, 1984, pp. 581-609.
- ㊃ Settia, A.A., «Villam circa castrum restringere», op.cit., pp. 937-938.
- ㊄ Montanari, M., Borghi di nuova fondazione e politiche comunali nel Piemonte dell'ultima età sveva, in: BSBS 1997, pp. 471-510; Conte, E., La ribellione al sistema signorile nel Duecento italiano. Aspetti giuridici, in: Fögen, M.T. (Hg), *Ordnung und Aufbruch im Mittelalter. Historische und juristische Studien zur Rebellion*, Frankfurt am Main, 1995.



- ②⑧ Faccio, G. C. (a cura di), *Il libro dei «pacta et conventiones» del comune di Vercelli*, Novara, 1926 (以下 Pacta); Faccio, G. C. / Ranno, M. (a cura di), *I Biscioni*, tomo 1, Torino 1939 (以下 I Biscioni, tom. 1); Ordano, R. (a cura di), *I Biscioni*, tomo 2, vol. 2 Torino 1976 (以下 I Biscioni, tom. 2, vol. 2); Durando, E. (a cura di), *Carte varie relative a Casale ed al Monferrato*, Torino, 1908 (以下 Carte Varie); Gabotto, F. / Fisso, U. (a cura di), *Le carte dello archivio capitolare di Casale Monferrato fino al 1313*, I-II, Torino, 1907 (以下 CACC).
- ②⑨ Sangiorgio, B., *Cronica del Monferrato*, Torino 1780.
- ②⑩ Comoli Mandracci, V., Studi di storia dell'urbanistica in Piemonte: Casale, in: *«Studi piemontesi»*, 1973, vol. II, fasc. 2, pp. 68-87; Angelino, A. / Castelli, A., Indagini sulla storia urbana di Casale. Dal borgo di S. Evasio alla città di Casale (1350-1500), in: *«Studi piemontesi»*, 1975, pp. 279-291.

- ②⑪ Setta, A. A., *Monferrato: strutture di un territorio medievale*, Torino 1983, pp. 103-158. また、トリノ大学の卒業論文に次のものもある。
- Otton, P., Casale Monferrato nell'età comunale, Torino 1974 (dattiloscritto presso l'Istituto di storia, sezione Medioevale, della facoltà di Lettere dell'Università di Torino).
- ②⑫ 十三世紀前半におけるカザールの人口は約二〇〇〇人と推定されて、S. 9° Pitarello, L., Casale Monferrato, in: *Città da scoprire, guida ai centri minori. Italia settentrionale*, Milano 1983, p. 110.
- ②⑬ 服部良久「中・近世ティロール農村社会における紛争・紛争解決と共

## 第一章 中世集落カザールの形成と発展の概要

カザールは現在カザール・モンフェラートと呼ばれ、南ピエモンテのポー側南岸に位置する。中世にはその守護聖人、

同体「京都大学文学部研究紀要」第四一号、二〇〇二年。同「中世盛期ドイツにおける紛争解決と国制」『京都大学文学部研究紀要』第四三号、二〇〇四年。同「中世ヨーロッパにおける紛争と紛争解決——紛争解決とコミュニケーション・国制」『史学雑誌』一一三・二〇〇四年。同「中世ヨーロッパにおける紛争と秩序——紛争解決と国家・社会」『史料』八八・一、二〇〇五年。また、中近世の在地社会と紛争、領域国家に関連する問題については、日本史研究の成果から多くを学んでいる。以下五十音順に挙げるものは、筆者が管見の限りにおいて学ぶ機会を得たものに限られるが、それ以外にも筆者未見の研究や間接的に関連する研究が多数あることは言うまでもない。

稲葉繼陽『戦国時代の荘園制と村落』、校倉書房、一九九八年。同「中・近世移行期の村落フェードと平和——日本中世における権利と暴力」歴史学研究会編『紛争と訴訟の文化史』(シリーズ歴史学の現在)二、青木書店、二〇〇〇年。大山喬平「日本中世農村史の研究」岩波書店、一九七八年。勝俣鎮夫『戦国法成立史論』東京大学出版会、一九七九年。同『戦国時代論』岩波書店、一九九六年。小林一岳「日本中世の一揆と戦争」校倉書房、二〇〇一年。酒井紀美「日本中世の在地社会」吉川弘文館、一九九九年。坂田聡・榎原雅治・稲葉繼陽『村の戦争と平和』(日本の中世)二二、中央公論新社、二〇〇二年。田中克行「中世の惣村と文書」山川出版社、一九九八年。藤本久志『豊臣平和令と戦国社会』東京大学出版会、一九八五年。同「村と領主の戦国世界」東京大学出版会、一九九七年。同「戦国の作法——村の紛争解決」平凡社ライブラリー、一九九八年。

聖エヴァジオの名を冠してカザーレ・サン・エヴァジオと呼ばれ、ヴェルチェッリ司教の領主支配に服していた。九九九年のオットー三世の特許状にはその旨を認める記述が見える。<sup>①</sup>

しかし一一八六年、フリードリヒ一世から与えられた特許状では、コンスル（＝「統領」。共同体内から選出される政治的指導者）及びボデスタ（＝共同体構成員外から任命される行政官）がその住民達とともに裁判を行う権利や、市場開設権、各種フォドゥルムからの免税権が認められている。従って、既にこの時点でコンスル制度が確立しており、事実上の自治は行われていたものと考えられる。<sup>②</sup>一二〇三年、司教とカザーレのムーネとの間に様々な争いが起こった結果として、司教の支配権を確認する協定がなされているが、そこでは殺人・窃盗・放火・平和破壊等の大罪を除けばほとんどの裁判権の行使がカザーレのコンスル側に認められている。<sup>③</sup>

早期の自治確立の背景には、ヴェルチェッリら都市ムーネと対抗する皇帝や貴族の支持と保護があった。同一一八六年の特許状には、証人としてモンフェラート侯コラードとボニファーチヨ及びビアンドラーテ伯グイドの名が見える。<sup>④</sup>このように貴族や皇帝と密接な関係を持つ城塞集落が、イタリア諸都市間のより広域的な争いに巻き込まれるのは時間の問題であった。ヴェルチェッリはピエモンテやロンバルディアの周辺都市、とりわけミラノとの同盟・協力関係を着々と構築するが、これらの諸都市の行動は、中小の農村集落の動きにも影響する。一二一〇年のミラノとヴェルチェッリの同盟には、パチリアーノ、トルチェッロ、コンニョーロ、ロツピオといったカザーレ周辺の諸集落も参加している。<sup>⑤</sup>

インノケンティウス三世によるオットー四世の破門が行われ、その支持がフリードリヒ二世の上に移ったのはその頃のことであり、戦火は忽ち北イタリアに拡大したが、カザーレはモンフェラート侯とともにフリードリヒ二世の陣営に参加する。結果一二一五年、オットー側についたミラノと同盟したサヴォイア伯の軍がカザーレを占領。ところがカザーレ側からの降伏の申し出にも関わらず、ミラノは捕虜となったカザーレの住民を移送して投獄した後、集落を徹底的に略奪した上に破壊してしまった。<sup>⑥</sup>破壊後のカザーレとその住民の状況は凄惨を極め、ホノリウス三世がカザーレ近隣の諸司教に送

付した書簡には、「物乞いを余儀なくされている」カザール教会への支援を要請する件がある。<sup>⑦</sup>

にも関わらず、カザール再建の努力は速やかに進められた。イタリアのフリードリヒ二世支持派の勢力回復に伴い、モンフェラート侯やカザールにも皇帝の支援が惜しみなく与えられ、旧来の特権が再確認される一方、地域での独自の動きも進んだ。破壊による痛手からの早期回復を期して、カザールは隣接する集落、パチリアーノと合併して拡大する道を選び、それを両集落の協議によつて実現する。事実上の合同は一二二〇年前後に実現したと想定されているが、最終的にフリードリヒ二世によつて承認を受けたのは一二四八年の事であった。<sup>⑧</sup>

集落合併後のカザールには急速な拡大の跡が見られる。組織としてのコムーネの発展の証左となる共同体規約の出現もこの時期で、現存最古の規約の断片は一二七九年の日付を持っている。<sup>⑨</sup> またその前年の一二七八年には、カザールは向こう五年間モンフェラート侯グリエルモ七世をカピターノ（＝軍指揮官）として迎える事を決定し、代表をグリエルモの下に送り、カピターノの権限を定めた規約を提出している。このカピターノ規約は、カザールの全体集会 *consiglio generale* とポロのコンスル（＝民衆）の全体集会 *consiglio generale del popolo* と、こう二つの集会の権威の下に、カザールの「騎士とポロのコンスル」と二四人の *sapientes* によつて作成され、命じられた。ここに「騎士とポロのコンスル」とあるように、この時期にはカザールの内部では明確に区別される二つの階層が生まれ、その全体が一つの組織に統合されていたのである。<sup>⑩</sup>

このカピターノ規約の内容からは、自治共同体としてモンフェラート侯に対しても極めて強い立場を押し出すカザールの姿が浮かび上がってくる。規約は言う。「このカピターノ職の意味する所は、候殿は騎士と家臣を率いて、自らの、又はその盟友の都合のためにカザールに來たい時にはいつでも來ることが出来る……という事であり、現職の、又は將來のカザールのボデスタの上にも、コムーネと人々の上にも、その他いかなる裁判権も持つ事は出來ず……同地の全支配權や刑事・民事双方における全上下裁判権 (*merum et mixtum imperium*) は完全にカザールのコムーネの規約の定める形式に従

って、カザーレのボデスタとその体制によって保持されるという事であり、同じく、現職の又は将来のボデスタの名誉及び裁判権は一切縮小されないという事である。<sup>⑪</sup>

グリエルモの相続者ジョヴァンニの死後、一三〇五年アレラミチ系モンフェラート侯家は断絶するが、ジョヴァンニの姉妹ヨランダとビザンツ皇帝アンドロニコス・パライオロゴスの子テオドロが後継者として迎え入れられ、パレオロゴ朝を開始する。<sup>⑫</sup> 同時期カザーレでは内部での党派抗争が激化し、その調停者としてのモンフェラート侯との関係は次第に緊密化する。一三一九年、侯国内の諸問題の解決のために開かれた集会でカザーレの内乱にも平和が命じられた。ここではカザーレの二党派が、モンフェラート侯を調停者、裁判官及び主君として認め、望む旨が宣言された。<sup>⑬</sup> そして一三五一年には、モンフェラート侯ジョヴァンニ・パレオロゴを「シニョーレ」（＝僭主）として迎えることがカザーレの全体集会で決定された。カザーレ側の代表者は侯に対して「侯ジョヴァンニ殿とその相続者は、永遠に、カザーレの城塞とその地域と領域内の人々への上下裁判権及び各種の裁判権を持つシニョーレで」あることを宣言する。<sup>⑭</sup>

だが、その二日後に侯側からカザーレに「恩恵」として下された文書の内容を見ると、カザーレが事実上大幅な権限を保持していたことが分かる。そこではモンフェラート侯国領内の者からカザーレの共同体自身が自らのボデスタ候補を選出することができること、及びそのボデスタが上下裁判権を行使することが認められている。侯には反逆罪、放火罪、姦通罪、男色の罪、暴行罪、偽造罪などへの裁判権が留保されるが、その他は全てカザーレの共同体に属し、条例が尊重されるものとされている。徴税権も全て現状のままカザーレに承認されている。<sup>⑮</sup> つまりカザーレはシニョーレであるモンフェラート侯に対してあくまでも高度な自治を保持していたのである。同様の立場は一時的にその支配下に入ったヴィスコンティ家に対しても変化していない。一三七〇年、モンフェラートに侵攻したガレアツォ・ヴィスコンティにカザーレは自ら降伏するが、その際カザーレ側から降伏条件を提出し、現状の特権を承認させている。<sup>⑯</sup> ヴィスコンティ家による支配は極めて一時的なもので、約三〇年後、一四〇四年にはミラノとモンフェラート侯との同盟の結果侯側に返還される。<sup>⑰</sup>

その後もカザールは順調な発展を続け、一四七四年には司教座としての地位を獲得し「都市」に昇格、ついでモンフェラート侯国の首都に定められるのである。<sup>⑧</sup>

これらの事実は、君主との関係形成に先立つ時期において、カザールが既に高度な自治能力を発達させていたことを十分に物語っているとと言えるだろう。だが一方では、その自治の発展期はまさに都市間党派抗争の時期にあたり、隣村との合併がその渦中に実現しているという事実は、この自治の発展が領主である司教からの自治獲得の単なる延長の産物ではなく、質的転換を伴うことを想像させる。その具体的な展開を検討することが続く考察の課題となるが、次章ではまず、共同体条例に基づいて共同体組織としてのカザールの実態を明らかにし、ついでその形成過程の検討を進めたい。

- ① *Monumenta Germaniae Historica*(=MGH). *Diplomata regum et imperatorum Germaniae*, II, *Ottonis III. diplomata*. Berline 1957, doc. 323, p. 750.
- ② Carte varie, n. 3, p. 215.
- ③ Carte varie, n. 6, p. 220.
- ④ Carte varie, n. 3, p. 216.
- ⑤ Manaresi, C (a cura di), *Gli atti del comune di Milano fino all'anno 1216*. Milano 1919, n. 370, 375, 376, 377, 380, 381; *Pacta*, n. 4, p. 5.
- ⑥ Sangiorgio, B., op.cit., pp.53-54.
- ⑦ CACC, I, n. 97, p. 154.
- ⑧ Sangiorgio, B., op.cit., p. 64.
- ⑨ Carte Varie, n. 18, pp. 239-240.
- ⑩ Sangiorgio, B., op.cit., p. 71.
- ⑪ Sangiorgio, B., pp. 71-73.
- ⑫ *ibid.*, pp. 85-87.
- ⑬ *ibid.*, pp. 102-109.
- ⑭ *ibid.*, pp. 168-169.
- ⑮ *ibid.*, pp. 169-171.
- ⑯ *ibid.*, pp. 204-207.
- ⑰ *ibid.*, p. 290.
- ⑱ Setta, A.A., «Fare Casale città»: prestigio principesco e ambizioni familiari nella nascita di una diocesi tardomedievale, in: *Vescovi e diocesi in Italia dal XIV alla metà del XVI secolo* (Italia sacra 44), Roma 1990, vol. II, pp. 675-715; ID., Da pieve a cattedrale: la «promozione» di Casale a città, in: *Chiese, strade e fortezze nell'Italia medievale* (Italia sacra 46), Roma 1991, pp. 349-389.

## 第二章 中世カザーレの共同体組織とその秩序形成・維持機能

集成として現存するカザーレの共同体条例は一四世紀末年に遡り、ヴィスコンティ家支配下で編纂されたものである。断片的文書として現存する最古のものは一二七九年の日付を持つが、大部分の条項の作成年代はおよそ一三〇六年から一三八五年に渡り、それらが更に先行する法規を継承したものであるのかを確定するのは困難である。<sup>①</sup>だが前章で述べたように、一二七八年には「騎士とポポロの全体集会」がカピターノとの対外的交渉に法的効力を与える機関として存在しているが、この集会は断片的にいくつかの一三世紀末の外交文書に見える。<sup>②</sup>従って共同体組織の中核の確立をこの時期まで遡らせることは可能である。

条例の全体は五分冊に付加条項を加えたものから成る。第一・第二分冊はそれぞれ、コムーネの組織と公的問題、犯罪と刑罰を扱い、第三・第四分冊は私人間の関係や農業運営上の取り決めから成り、その他は第五分冊が扱う。<sup>③</sup>興味深いのは、早期に都市のコンタードに組み込まれその支配を受け入れた通常の農村コムーネ条例には見られない刑罰規定が独自の分冊を成し、裁判当局としての姿をコムーネが明確に打ち出していることである。<sup>④</sup>

この条例によれば、共同体に対して統治権を執行し、裁判と防衛の任に当たる最大の権限を持つのはポデスタ *podestà*、*podestà* である（ほぼ同じ職権を指すのに *rector*、*vicarius* の用語も用いられる）。ポデスタは通常外部から招かれる役人であり、従者として裁判官や騎士、助役を従え、カザーレの条例を遵守して統治に当たらなければならない。この外部の役人を統制し、コムーネの法を守る任務を負う共同体内部の役職がコンスル又はプロコンスルであり、「騎士とポポロの全体会議」から選ばれる。その他のコムーネの役職としては、出納役と作物監視人があり、時には個別の重要問題に関して少人数の *sapientes* に全権が与えられることもある。<sup>⑤</sup>

条例の条項から一見して明らかなことは、外部者であるポデスタとその従者団を統制し、条例を保護し事実上の権限を

共同体が保持するために多数の配慮がなされていることである。ポデスタは第一条において「カザールの条例に従って、条例の定めのない場合にはローマ法に従って、ローマ法の定めのない場合にはカザールの慣習に従って」住民とその財産を治め防衛することを誓約する。<sup>⑥</sup> 続いて第七条において「カザールのコミュニネのレクトールは何者であれ、またその従者は何者であれ、いかなる方法、いかなる理由においても、カザールのコミュニネの条例の作成又は改変の場に参加することも臨席していることもできない」ことが定められ、<sup>⑦</sup> 条例を定める権限を共同体が独占することが示される。任期終了後にはポデスタとその従者団は職務執行状況の検査を受け、彼らに対する住民からの訴えはコンスルによって裁かれる。<sup>⑧</sup> また、刑罰の確定に際しては、条例に定めのない場合にはポデスタは必ずカザールのコミュニネの検事の見解に従い、その臨席を得て宣告しなければならず、この手続きに違反した場合にはいかなる刑罰も無効である。<sup>⑨</sup> 刑罰の規定は公的な集会において承認を得なければならず、この承認を欠く刑に関してポデスタは罰金の徴収ができない。<sup>⑩</sup> このようにポデスタの行動を拘束する集会に関して、ポデスタはコミュニネのコンスル達の三分の一の同意なしには召集することができない。一方コンスルらが求めれば、ポデスタは集会の招集を義務付けられ、そこでの決定は遵守しなければならない。<sup>⑪</sup> このように、条例の制定権は完全に共同体の手中にあつて保護されているのであり、その組織的基盤は集会とコンスル職にあるのである。

カザールの共同体構成員が事実上の秩序維持機能を自ら担っていることは、第二分冊の犯罪と刑罰の規定に関しても明らかである。傷害や人身・財産の攻撃に対しては基本的に詳細な罰金刑が定められているが、公共の場での喧嘩や抜刀に対しては住民がその追跡の義務を負う。第一四三条には、「もしポデスタ殿が、カザールの人々が武器に訴えて(他人の家や広場に赴くように警告を発したならば、あるいはコミュニネの役人を通じて措置を課したならば、全カザール住民は武器を持って、ポデスタ殿の家、あるいはコミュニネの広場へ行き……レクトールの命令に従い、遵守しなければならない。』とあり、全住民が武装して公共の秩序維持に当たる義務が課されている。<sup>⑫</sup> よそ者がカザール住民を攻撃した場合には、その場にいたカザール住民は追跡する義務を負う。<sup>⑬</sup> 叫び声を聞いた場合の武器を持つての叫喚追跡義務もある。<sup>⑭</sup>

このように、カザールにおいては共同体が立法と警察の対内的平和秩序維持機能を担っていることが条例には明らかに示されている。一方、対外的なそれについては共同体条例から知ることはできないが、若干の外交文書から垣間見ることが出来る。

一二七二年六月二四日、近隣のやはり都市的集落であるヴァレンツァがカザールに平和を求めた。この平和の申し入れは、ヴァレンツァのボデスタがヴァレンツァの会議とムーネの意志に従って行ったものであり、ヴァレンツァにもカザール同様のムーネ組織が成立していたことを窺わせる。その後ヴァレンツァはカザールから二つの文書を受け取り、それが本物であることの認証を求めて再びカザールに文書を送ったが、そこには二つのうち一方が「カザールのムーネの印章」を押されていたとある。ここには、カザールもヴァレンツァも対外関係において公的文書を權威付けする形式を十分に発達させ、その權威を担う主体として行動していたことが分かる。

同様の公文書形式の発達は一二九二年、カザールがマッテオ・ヴィスコンティにカピターノ職を提供すべく使節を送った時の文書にも見える。文書作成者は、「カザールのボボロのカピターノであるグイダコ・グテリオ殿が、私、カザールのボボロの公証人であるジャコボ・デ・グラチャーノに、下記の助言と改変が真正であることを証言し、公文書の形式で作成するよう命じた。……」と述べている。従って、カザールの共同体は、対内的にも対外的にも十全な秩序形成・維持機能を果たしていたと結論することが出来るだろう。

しかし、このような実力を持つにも関わらず、《準都市》共同体カザールは、少なくともここで考察される時期に関しては大都市共同体とは本質的に異なると言わねばならない。カザールも一三世紀後半には周辺の農村に対して裁判権を拡大しているが、大都市の特徴がそのコンタードに対する領主性である一方、カザールは都市と法制上差別された支配対象としてのコンタードを形成しておらず、条例においても、カザールの共同体成員となる条件はフォドウルムの支払い以外に特定されていない<sup>⑬</sup>。



一二九四年、カザール東方の集落フラッシネートのカヴァツリヤ伯達が、フラッシネートの上下裁判権及び伯権その他の諸権限を全てカザールに譲り渡すという協約をなし、フラッシネートの全領民はカザールのムーネの上下裁判権に服し、フォドウム始め全ての税を他のカザール住民と同じようにカザールのムーネに支払うこととなった。この時の文書には、「また領民達を……彼らが永遠にポポロのソキエタス成員であり、カザールのポポロであるようにして……ポポロの規約と法の形式に従ってあらゆる権利が維持されるようにして迎え入れた。」とある。ここではカザールとフラッシネートの領民の間に差は認めれない。<sup>⑮</sup>

カザールは対内的・対外的に国家的機能を行使し、大きな自立性と実力を持つが、領主的大都市とは原理を異にする共同体であると言えるだろう。従って、このような共同体における紛争の展開には、都市のそれとは異なるより在地的意義と特徴が確認されるのではないだろうか。以下ではこの点を具体的な紛争の検討を通じて考察して行きたい。

- ① Cancian, P., Gli statuti medievali di Casale: codici e tradizione erudita, in: P. Cancian/ G. Sergi/ A.A. Setta (a cura di), *Gli statuti di Casale Monferrato del XIV secolo*, Alessandria, 1978, pp. 93-95.
- ② Carte Varie, n. 15, n. 16, n. 23.
- ③ Cancian, P., op.cit., p. 101.
- ④ 農村共同体条例の一般的特徴について Varanini, G.M., La tradizione statutaria delle Valle Brembana nel Tre-Quattrocento e lo statuto della Valle Brembana superiore del 1468, in: *Gli statuti della Valle Brembana superiore del 1468*, M.Cortese (a cura di), Bergamo, 1994, pp. 13-62; Chitolini, G., A proposito di statuti e copiatoci, *jus proprium e autonomia. Qualche nota sulle statuzioni delle comunità non urbane nel tardo medioevo lombardo*, in: *«Archivio storico ticinese»* 1995, pp. 171-192.
- ⑤ Sergi, G., Gli statuti casalesi come espressione di autonomia istituzionale in un comune non libero, in: *Gli statuti di Casale Monferrato*, op.cit., pp. 1-30.
- ⑥ *Gli statuti di Casale Monferrato*, cap. 1.
- ⑦ *ibid.*, cap. 7.
- ⑧ *ibid.*, cap. 8, 9.
- ⑨ *ibid.*, cap. 11.
- ⑩ *ibid.*, cap. 13.
- ⑪ *ibid.*, cap. 24.
- ⑫ *ibid.*, cap. 143.
- ⑬ *ibid.*, cap. 149.
- ⑭ *ibid.*, cap. 224.
- ⑮ *Carte Varie*, n. 15, pp. 236-237.

<sup>⑥</sup> *ibid.*, n. 16, p. 237.  
<sup>⑦</sup> *ibid.*, n. 23, p. 244.

<sup>⑧</sup> *Gli statuti di Casale Monferrato*, cap. 115.  
<sup>⑨</sup> *Carte Varie*, n. 24, pp. 245-246.

### 第三章 村落間紛争と共同体形成

#### ——カザーレとパチリアーノの紛争

第一章で見たように、カザーレの強化と拡大の一因となった重要な出来事にカザーレとその隣接集落パチリアーノの合併事業がある。だがこのパチリアーノはカザーレと敵対するヴェルチェッリやミラノの同盟に参加していた上に、ミラノの聖アンブロジー修道院と封建関係も結んでいる。<sup>⑩</sup> 事実パチリアーノが受けた破壊は、カザーレの場合とは逆に、フリードリヒ二世によって反逆への罰として行われたものであったと言われ、同皇帝によってこの合併に承認が与えられたのは一二四八年になってようやくのことである。

合併前、パチリアーノは、カザーレとヴェルチェッリとの戦闘に際しては常にヴェルチェッリに加勢していた。従ってカザーレとパチリアーノの間には実際の軍事力行使した戦闘が闘われていたのであり、それは大都市間の戦争との結びつきによって被害と加害の関係を常に更新・拡大する傾向を伴っていた。そのような二集落の合併の背景にはどのような条件があったのだろうか。以下では、合併に先立つ時期の両集落の関係を、一二世紀末葉から一三世紀の初頭にかけて教会を中心に闘われた長い係争を通して検討してみよう。

#### (1) 紛争の展開

問題の紛争はヴェルチェッリの司教法廷で争われた、カザーレのサン・エヴァジオ教会とパチリアーノのサン・ジェルマノ教会の間の従属関係をめぐめるものであり、争いの過程は次のようなものであった。

一一八八年、ヴェルチェッリ司教アルベルトの法廷に訴訟が持ち込まれる。カザール教会側の聖堂参事会は、パチリアーノ教会は完全にカザール教会に従属していることを主張した。対してパチリアーノ教会側は、ティトゥルス (titulus 小教会) として正式にカザール教会に従属したことはかつて一度もないと主張。その証拠としてカザール教会との協定文書を持ち出した。この協定はかつて教皇ルキウス三世による承認も得ていたものだ、というのである。司教はパチリアーノ教会の言い分を認め、パチリアーノの人々は幼児洗礼に際してはカザール教会に赴かねばならないが、その洗礼用の費用の負担を免除する裁定を言い渡した。<sup>②</sup>

カザール教会側はこれを不満とし、教皇に上訴したが、二審でもヴェルチェッリ司教の裁定が有効とされ、上訴は棄却された。<sup>③</sup>ここで問題は一度解決したかに見えたが、一二〇五年、パチリアーノ教会がカザールと協定した義務を果たしていないということを知った教皇インノケンティウス三世が、次期ヴェルチェッリ司教ロタリオにこの問題の解決を命じた。これに対してパチリアーノ側は、平和への愛のためにカザールは既に全ての権利を放棄し、協定した、と主張した。カザール側はパチリアーノの主張を否定。パチリアーノは、その協定を完全に承認する内容のケレスティヌス三世の勅書を示して反論した。今度のパチリアーノの主張に対しては、司教ロタリオが疑問を呈しローマに訴えた。協定文書の調査を実施したインノケンティウス三世は、一二〇七年一月、この文書を偽造と断定。<sup>⑤</sup>ロタリオはインノケンティウスの判断を受けて、偽文書が提出される以前のヴェルチェッリ司教の裁定 (一一八八) を再確認した。<sup>⑥</sup>

しかしパチリアーノ側はこれにも従わなかったため、一二〇七年四月、ロタリオは聖土曜日の洗礼にはカザールに赴くという決定に従わなければ破門に処すと宣告した。<sup>⑦</sup>インノケンティウス三世もロタリオの決定を承認。<sup>⑧</sup>その後一二一〇年五月、カザール側が、パチリアーノはほとんど破門に処せられていながら聖務を行使しているのは不正である、として告訴する。今度はパヴィーア司教が、一一八八年の裁定を再度確認して両者を訴訟から解放する。<sup>⑨</sup>

だがパチリアーノはなお幼児洗礼のためにカザールに赴くことを拒否し続け、一二一〇年六月破門に処された。ここに

至つて一二一年、カザーレの聖堂参事会とコミュニネのコンスル達は、パチリアーノ教会に關する彼らの権限を決して譲り渡さないことを誓約する<sup>⑪</sup>。これに対する報復として、パチリアーノの人々はカザーレの飼料を差し押さえる<sup>⑫</sup>。そしてなお反論を繰り返した。内容は「パチリアーノからカザーレに幼児を運んでいくことはできない。道のりがあまりに長く、また道も悪く危険であるからだ」というものであった。さらに、カザーレの参事会員達もヴェルチェッリ司教から破門を受けている、として逆提訴した。一二二年、インノケンテウス三世は、トリノ司教とヴェルチェッリ司教、ルチエデオ修道院長に公正な協定が両者の間に実現するよう取り計らいを委任<sup>⑬</sup>。これ以後の紛争の展開は史料に見えない。

この紛争は一見して明らかな教区の権限争いである。パチリアーノ教会側は、自らがカザーレ教会の *titulus* であることを否定していた。*titulus* は秘蹟権も十分の一税徴収権も持たないからである<sup>⑭</sup>。ここには両教会のこれらの権限を巡る争いがあつたことは間違ひなく、そのような状況を引き起こす背景として、教会所領の構造変化とそれに伴う小教区独立の動きがあつたことは確実である<sup>⑮</sup>。リパンティの研究によれば、聖エヴァジオ教会にも、経営合理化のために所領の一円化を目指す傾向が見られたが、一二世紀から一三世紀初頭にかけての困難な時期においては、この努力が効を奏したとは言いがたいようである<sup>⑯</sup>。この紛争は、旧来の教区教会と、その困難に乗じて独立を目指す小教会との間の紛争の一事例であると言えよう。従つてここには、小教区教会を中心とする隣人団体Ⅱ共同体形成の動きが伴つていたことも容易に想像される。

よつて紛争の当事者は教会であるが、注目すべきことは、パチリアーノ側の係争主体に当初から「コミュニネ」が含まれており、世俗の組織であるコミュニネがこの問題に積極的に関与していたことである。一二〇七年、インノケンティウス三世がヴェルチェッリ司教ロタリオの裁定を確認した文書においては、「汝ら（聖エヴァジオ教会の参事会）とパチリアーノの教会及びコミュニネとの間に問題が争われているところの幼児洗礼とその他の条項に關して」と、パチリアーノのコミュニネが係争主体として明記されている<sup>⑰</sup>。一二一〇年パヴィア司教が裁定を下した時の文書には、カザーレ教会側から提出され

た文書が引用されているが、そこにも、「私、カザールの聖エヴァジオ教会の宗徒であり代表であるベトロは……洗礼のためにその幼児達をカザールの聖エヴァジオ教会に送ることを拒否しているパチリアーノの人々またはコムーネについて訴えます……」と、ここにもパチリアーノのコムーネの明記があり、当事者間でも明確にコムーネが主体として意識されていたことが分かる。<sup>⑮</sup>一方のカザール側でも、一二一年には「コムーネ」と聖堂参事会が一致して誓約が行われるに至っている。誓約文には次のように述べられている。

「……カザール・サン・エヴァジオの大コンスル達……その他多くの評議員と多くのその他の人々……は、聖なる神の福音書にかけて誓約した。すなわち彼らは、いついかなる時にも、パチリアーノの聖ジェルマノ教会の聖職者たちとは、その教会や、パチリアーノの人々や領民の名において、洗礼問題に関しても、またその他上述の聖ジェルマノ教会に関する諸規定に関しても、上述のカザールの聖エヴァジオ教会、あるいはその参事会員たちに……その教会の名において、平和や協定や降伏や赦免をなさない。加えて彼らは、聖エヴァジオ教会の参事会員達が……その誓約を守り保持すべく、ありとあらゆる助力と助言をなすということ、またこれらのコンスル達とすべての俗人たちに関しても同様にすること、そして参事会員であれ俗人であれ、この誓約には永遠に決して反しないことを。」<sup>⑯</sup>

又、教会裁判が進展している最中に、背後では度重なる暴力事件が勃発していたことを窺わせる記述もある。インノケンティウス三世によつて偽文書と断定されたケレスティヌス三世の勅書中には、次のような記述がある。

「聖ジェルマノ教会の名のもとにある汝（パチリアーノ）と、カザール教会との間に、汝に同（カザール）教会が要求した服従に関して紛争が争われたが故に、多くの血が流れ、少なからぬ殺人が果たされ、わずかとは言えぬ費用がかけられたのである。」<sup>⑰</sup>

……」

偽文書である以上、記述のすべてが真実であるとは言えない。しかしこの記述はカザール教会が権利を放棄したことを事実として主張する根拠として十分に説得的なものとして書かれたはずである。このような紛争が周知の事実であつたか

からこそ、同様の記述が可能だったのではないだろうか。

一二一年にはパチリアーノの人々による飼料差し押さえの報復もある。さらに一二一四年、カザーレ側によるパチリアーノの司祭の監禁・投獄事件も発生している。この事件を知ったヴェルチェッリの聖堂参事会はカザーレに対して破門の脅しをもって警告を発したが、カザーレ側は聞き入れず、結局聖職者とポデスタ・評議会員の全員が破門に処されている。いずれもこの係争が法廷外の暴力行使や強硬手段への訴えと接続しながら継続していたことを示すと言える。教会裁判の法廷で争われ明らかになるものは、紛争全体のごく一部にすぎず、法廷外では暴力紛争とも連結していたのである。

このようにエスカレートする紛争を担っていたのは、聖界所領の経営難を背景として、小教区を中心に新たにまとまった新共同体であった。換言すれば、ローカル社会に紛争が展開する前提となったものは、所領構造の変化とそれに伴う共同体再編に他ならなかったのである。

## （2）地域と紛争の主体

右ではカザーレもパチリアーノもコミュニネとして結集し、小教区教会を中心に暴力を伴う紛争にも臨んでいたことが明らかにになった。ところが一方で、いずれの集落も内部にも深刻な分裂があったことが、いくつかの史料には示されている。カザーレについては一三世紀以降に何度か内部に党派抗争が生じたことが記録されており、一方パチリアーノに関しては、一二一九年、内戦が発生し収束したことが記されている。

この内戦について語る史料は一二一九年七月に作成された一枚の休戦協定のみである。<sup>②</sup>開戦にいたった直接的な動機も明らかではないが、ともかくパチリアーノの人々の間に二つの党派が形成されて戦闘が繰り返され、ヴェルチェッリの有力市民ロジェリオ・デ・ボンドノとアルディッチョ・アッヴォカーティの仲介によって両派の間に休戦が実現したこと

がここから分かる。両派はそれぞれパチリアーノ「内部」*intinseca*の党派、パチリアーノ「外部」*estrinseca*の党派と呼ばれており、それぞれが近隣の封建貴族を「ポデスタ」として代表者に立てていた。「外部」派のポデスタはオッチミアーノ侯マンフレード、「内部」派のポデスタはオットボーノ・デ・ベネディクトであった。両者ともヴェルチェッリ市民である。

文中には次のような条文がある。

「……マンフレード殿とパチリアーノ外部の人々とその党派の者は皆、オットボーノ殿もパチリアーノ（内部）の人々もその党派も攻撃しない。……外部のパチリアーノの人々は、自身も、またパチリアーノの城塞内部にいるその配下の者も、ポデスタあるいはレクトールの命令なしには、同城塞やその隣接地には滞在しても居住しても入ってもならず、もしあるとしてもその保有地に戻つてもならない。」

内戦の結果として「外部」側の人々はパチリアーノから追放されているのである。事実、当時の諸都市ムーネでは、しばしば党派抗争の結果一方の党派が市外追放を受けていたが、この非追放者の集団は *comune estrinsecorum* と呼ばれる独自の組織を形成していた。<sup>24</sup> パチリアーノの二党派もその一事例であろう。

それぞれの党派を特徴付けるものは何だろうか。休戦協定は「外部」派の追放を承認することになったが、その仲裁をした二名はいずれもグエルフィの有力ヴェルチェッリ市民である。また、「外部」側の人々と「内部」側の人々はそれぞれに、ヴェルチェッリの貴族であるポデスタ以外にも自派の人物二人ずつの名前を挙げ、休戦を遵守すべきことをポデスタとともに誓約させている。この四人の代表が実質上のリーダーだったと考えられる。「外部」側の代表はルフィーノ・ルーボとニコラオ・デ・チェツラ、「内部」側はアスクレリオ・デ・ドンナ・ベルタとグイド・カーネである。

アスクレリオ・デ・ドンナ・ベルタの名前は、内戦の五年前の二二四年、パチリアーノがヴェルチェッリと同盟を結んだ時の協定文中に見える。<sup>25</sup> 「内部」派の彼は同時期のパチリアーノのムーネの指導者であり、当時フリードリヒ二世

に対抗していたヴェルチェッリとの同盟を推進する役割を果たしていた。

これに対してルフィーノ・ルーボの側は、カザーレのコンスルとして登場している。彼は二二一年、教会の紛争で教会とコミュニネが結束してパチリアーノと対抗することを誓約した時の「大コンスル」の一人であった。<sup>⑤</sup>同年十二月には、カザーレの堀に近接した土地をカザーレ教会に売却もしている。<sup>⑥</sup>「外部」派のルフィーノはカザーレに土地を保有し、カザーレ教会と関係を保ち、要職にも就いたカザーレの人間だったのである。

このルフィーノ・ルーボの存在は集落合同以前にカザーレとパチリアーノの間に既にあった指導層レベルでの人的交流と、二集落にまたがる党派の集団の存在を推測させる。ここでパチリアーノの党派の構成員を後のカザーレの党派抗争のそれと比較してみると興味深い事実が浮かび上がってくる。<sup>⑦</sup>パチリアーノの「内部」派にはグイド・カーネ始めカーネ姓及びデ・ポンテ姓を持つ人々が多数見受けられる。これらの姓はそのまま一四世紀初頭のカザーレの「外部」派、後に「上部」派、又はカーネ・トゥルテ派と呼ばれる党派の構成員と重なっている。従って二集落の党派抗争は連結して展開していたのである。先の係争では教会の法廷闘争が地域と密接な繋がりを持ち、法廷外でも展開していた様子を見た。だがこれらの地域を人的要素から見れば、決して二つのコミュニネに二分されず、両集落にまたがって活動する一定数の人間のつながりが存在していた。そしてその内部に党派の抗争が展開していたのである。

このことから、以下のような背景を推測することが出来るだろう。パチリアーノとその周辺には、多数のカザーレ出身者が居住または権利保有しており、その結果パチリアーノに対するカザーレの影響力が強まった。それに抵抗する人々がカザーレと敵対するヴェルチェッリやミラノと結びつき、紛争を深刻化させた。二一九年の内戦の背景はおそらくこのようなものであったと考えられる。その結果、カザーレと強く結びついた人々が追放された。二集落の合併はこれらの追放者とカザーレの一派派を中心し、結果その対立党派はカザーレの「外部」派に結集したとの推測ができる。

従って、二集落の合併そのものが農村部における党派抗争の独自の展開の一過程であったと言える。合併はこのよう



なローカルな党派抗争を一つの共同体内部の問題にするという結果をもたらしたのである。そして拡大後のカザーレは、内部の党派への分裂とその間の対立を前提として出発することになったのであり、その調整機関としての共同体機構及び君主との関係が発達したと考えることができる。いずれにせよ、農村部で独自に有力な党派の結集が進み、その活動拠点となる共同体が拡大したという事実が、地域の地政に与えた影響は大きかったはずである。カザーレとはほぼ同時期のイタリアでは、広範な地域に同様の農村共同体が出現する。カザーレの事例が普遍性を持ちうるとすれば、これらの共同体形成を農村部における党派抗争の展開過程の産物としての側面からも理解することが可能になるであろう。

では、このような農村部の党派抗争には、都市のそれとは異なる独自の意義を認め得るのであろうか。この点については以下第四章で、抗争の主体であった共同体指導層の分析を進めることによって考察したい。

- ① Colli, E., *Paoliano e S. Germano: il comune, la collegiata, la chiesa, Casale Monferrato* 1914, pp. 10-12.
- ② CACC, I, n. 45, pp. 60-63.
- ③ *ibid.*, n. 47, p. 64.
- ④ *ibid.*, n. 52, p. 72.
- ⑤ *ibid.*, n. 71, p. 106.
- ⑥ *ibid.*, n. 72, pp. 106-109.
- ⑦ *ibid.*, n. 73, p. 110.
- ⑧ *ibid.*, n. 74, p. 110.
- ⑨ *ibid.*, n. 78, pp. 113-116.
- ⑩ *ibid.*, n. 79, pp. 116-117.
- ⑪ *ibid.*, n. 85, pp. 135-137.
- ⑫ *ibid.*, n. 89, p. 147.
- ⑬ *ibid.*, n. 88, pp. 138-139.
- ⑭ 谷泰「一二・三世紀北イタリア都市における教区現実」(会田雄一、中村健二郎編『異端運動の研究』京都大学人文科学研究所、一九七四年)。
- ⑮ 谷泰「上掲論文。Chitolini, G., *Benefici rurali nell'Italia padana alla fine del Medioevo*, in: *Pievi e parrocchie in Italia nel basso medioevo (sec. XIII-XV)*, Roma 1984, pp. 415-468; Settia, A.A., *Crisi e adeguamento dell'organizzazione ecclesiastica nel Piemonte basso-medievale*, in: *Pievi e parrocchie*, op.cit.
- ⑯ Ripanti, R., *Dominio fondiario e poteri banuali del capitolo di Casale Monferrato nell'età comunale*, in: *BSSS* 1970, pp. 109-156.
- ⑰ CACC, I, n. 74, p. 110.
- ⑱ CACC, I, n. 76, pp. 111-113.
- ⑲ CACC, I, n. 85, p. 135.
- ⑳ CACC, I, n. 52, pp. 72-73.
- ㉑ I Biscioni, tom. 1, vol. 2, n. 360, pp. 264-265.
- ㉒ I Biscioni, tom. 2, vol. 2, n. 66, pp. 117-122.

- ②③ G. Fasoli, *Oligarchia e ceti popolari nelle città padane fra il XIII e il XIV secolo*, in a cura di R. Elze, G. Fasoli, *Aristocrazia cittadina e ceti popolari nel tardo Medioevo in Italia e in Germania (Atti della settimana di studio 7-14 settembre 1981, Annali dell'Istituto storico italo-germanico, Quaderno 13)*, Bologna 1984, p. 12.
- ②④ I Biscioni, tom. 2, vol. 2, n. 65, pp. 115-116.
- ②⑤ CACC., I, n. 85, pp. 135-137.
- ②⑥ CACC., I, n. 87, pp. 138-139.
- ②⑦ De Conti V., vol. II, op. cit., p. 187; Mandelli V., *Il comune di Vercelli nel medio evo*, tomol. Vercelli 1857, pp. 177-182; Sangiorgio, B., op. cit., pp. 101-110.

#### 第四章 中世農村集落における紛争の担い手

前章で述べたような集落間の紛争と交流を支えていたのは、どのような人間集団だったのだろうか。その人的基盤を明らかにすることが本章の課題である。

まずは既出のルフィーノ・ルーポの後を再度追う事から始めて見よう。一二一年にカザーレの大コンスルとして登場するに先立って、ルフィーノ・ルーポの名が見える文書がある。<sup>①</sup>一二〇五年、ロランド・ルーポという人物が聖エヴァジオ教会の聖堂参事会と土地の交換を巡って争った。ロランドはパチリアーノに所有していた土地を同参事会に譲り、引き換えにカンポロンゴという別の集落の土地を受け取るようになっていたが、その後参事会から約束通りのものが引き渡されなかったためパチリアーノの土地への権利を主張していた。そこで改めてロランドと聖堂参事会の間に問題の土地の交換が確認され、パチリアーノの土地が参事会の下に帰した所で、ロランドの三人の甥も以後この交換に反対せず、パチリアーノの土地の保有権を放棄する旨を誓約した。この甥の一人がルフィーノである。ルフィーノの叔父はパチリアーノに土地を保有し、その土地をカザーレの聖エヴァジオ教会と取引していたのである。

この叔父ロランドの足跡は更に遡る。一二世紀末、ヴェルチェッリーナと呼ばれる地域の十分の一税の徴収権を巡るカザーレ教会と、カザーレ東部のフラッシネートの教会との係争記録に証人としてその名が見える。<sup>②</sup>ヴェルチェッリーナは

半ばフラッシネート教会に、半ばカザール教会に従属し、十分の一税については一部をカザール教会が、一部をフラッシネート教会が徴収する習いとなっていた。そこに改めて係争が持ち上がり、関係者の証言が求められたのである。それに對してロランドを含め証人達はほぼ口を揃えて、問題の土地はかつてロランド・ルーポの父オットーとオベルト・カーネ、そしてベリツィオ・ベッルコラの「カザールの騎士達」が共同で購入し、保有していたのだ、と述べた。このオットーの名は、一一八八年、パチリアーノの人々が聖アンブロージョ修道院長に誠実誓約をした時の文書にも、誓約者の一人ベトロの父として、*quondam ottonis lupi de casate* (= *casate*) と見える<sup>③</sup>。カザールの人間であつた事は間違いない。オットー自身がパチリアーノでも活動していたのかどうかは不明だが、その息子ペトロとロランドは双方がパチリアーノと密接な関係を持つている。

ルーポ家の人々とパチリアーノの聖ジェルマノ教会の關係を示す文書は多数ある。一二二六年、カザールのコンスルであるルフィーノ・ルーポの立会いの下に、オットー・ルーポが聖ジェルマノ教会の聖堂参事会長に任命されている<sup>④</sup>。このオットーはおそらくロランドの甥としてやはり前述の土地交換文書に名前の見えるルフィーノの兄弟であろう。他にも、ルフィーノの息子の一人マンフレードが一二三〇年同様に聖ジェルマノ教会聖堂参事会員として登場している<sup>⑤</sup>。マンフレードは一方で、一二六七年にカザールの聖エヴァジオ教会の聖堂参事会員としても見える<sup>⑥</sup>。ルフィーノ・ルーポとその息子達はカザールのコミュニネや教会及びパチリアーノの教会の双方で同時期に活動をしているのである。他にも、一二五九年の文書に聖ジェルマノ教会に隣接する土地の保有者として見えるカルデラ・ルーポがいるが、この人物は一二二八年、教皇グレゴリウス九世からロジニャーノの領主に宛てられたカザール教会との係争についての召喚状公開の立会人として、*de paciliano* という表記を伴って、パチリアーノ近郊所在のテンプル騎士団城館に姿を見せている<sup>⑧</sup>。テンプル騎士団員又はパチリアーノもしくはカザールの教会の關係者であつたと考える事が出来よう。

こうして見ると、合併以前からカザールとパチリアーノ双方の集落のコミュニネや教会で活躍していたルーポ家の人々が、

そのまま合併後のカザールでも要職に就き指導的な地位にあり続けた事が分かる。

この点は先ほどの文書でオットー・ルーボと共同でヴェルチェリーナの土地を購入したカーネ家の人間も同様である。前章で見たパチリアーノ内戦の停戦協定において「内部」派を代表していた人物にグイド・カーネがいたが、彼の名はやはり同時期のパチリアーノの関連文書にしばしば見える。一二〇二年、*Johannem et carriante atque Guidonem qui dicuntur Canes de loco paciliano* と、グイドと一緒に「パチリアーノのカーネ」と呼ばれているジョヴァンニとカッランテが見える。<sup>⑨</sup> ジョヴァンニは一一八八年、パチリアーノの人々の聖アンブロジー修道院長への誠実誓約者の一人である。<sup>⑩</sup> 一方、ヴェルチェリーナを購入したオベルト・カーネ自身の名はカザールの関連文書中にも頻繁に見られる。一二二一年、パチリアーノ教会との抗争の際にルフィーノ・ルーボが大コンスルとして誓約した時、同時に誓約した評議員の一人にオベルト・カーネがいる。<sup>⑪</sup> ここにもルーボ家とカーネ家の社会的地位の近似性が窺える。その他のオベルトの活動は、多くが聖エヴァジオ教会の経済活動と関連している。最も早い記録は一一九三年で、カザール教会の保有農が皇帝代理の面前でその保有財産を教会に引渡した際の証人として見える。<sup>⑫</sup> 続いて一二〇二年、ヴァレンツァの軍指揮官及びオッチミアーノ辺境伯とカザール教会の聖堂参事会長の間で近村ミラベッロ内の土地をめぐつて争われていた一件に調停がなされ、その違反者には五〇リブラの罰金の支払いが義務付けられた。その際罰金に関して聖堂参事会長側の保証人となったのがオベルトであり、彼がそれ相当の経済力と信用を持っていた事が分かる。<sup>⑬</sup> オットー・ルーボと共に行ったヴェルチェリーナの購入も結果的には聖エヴァジオ教会の十分の一税徴収権の拡大に資している事を考え合わせれば、彼らの活動と聖エヴァジオ教会の密接な関係がより明らかになる。

ではもう一人の「カザールの騎士」ブリチオ・ペッルコはどうか。他所でその名が見えるのは一一九八のヴェルチェッリとカザールの協定文書において、カザールのコンスルとしてである。<sup>⑭</sup> この時ロランド・ルーボも同時にコンスルとして登場しており、彼らの地位はやはり同等であった。以後ブリチオ自身の名は史料上に見えず、他のペッルコ姓の保持者が

ブリチオの直接の子や孫である事を示す記載もないが、やはり一二二一年の誓約者の中にカザールの評議員としてライモンド・ペッルコとグリエルモ・ペッルコの名が挙がっている。<sup>⑮</sup>ライモンドは一二〇二年、その兄弟カリストル・ペッルコと共に、モンフェラート侯ボニファッチョから聖エヴァジオ教会になされた譲渡の証人として見えている。<sup>⑯</sup>また、ライモンド・ペッルコはカザールの諸教会とトルチェッロの領主との間で争われていたカザール西部のロラスコにいたことも記録されている。<sup>⑰</sup>

従って、これら「カザールの騎士」達はいずれもカザールのコンスルや評議員といった要職に就く一方、聖エヴァジオ教会等カザールの教会と結びつき、その運営と経営に参加しつつ、パチリアーノを始め近村に土地を所有し、影響力を行使していたのである。

このような地域共同体において土地所有と共同体及び教会の要職によって、複数の集落にまたがって活動していた人々の、「騎士」という呼称の意味するところは何だろうか。一二世紀末及び一三世紀初頭段階での「騎士」という存在は曖昧さに満ちているが、史料に現れる姿からは、彼らはおよそ在地小貴族であると言える。

ルフィーノ・ルーポは、カザールの大コンスルとして誓約した時の文書およびパチリアーノの土地交換確認文書の双方において、一般に地域で何らかの裁判権を行使する領主に付される称号である *dominus* という呼称を付されている。<sup>⑱</sup>彼の叔父ロランドにも同じ称号が見られる。一方カーネ家やペッルコ家の者には、少なくとも一二世紀末から一三世紀初頭にかけての時期には *dominus* 号は見られない。一二五九年には *domini uberti canis de paciliano* が現れ、その後一二九四年に *dominus delphinus canis* <sup>⑲</sup>翌年に *heredes condan domini Jacobi advocati Canis* <sup>⑳</sup>が見える。この時期の *dominus* を裁判領主と考えることには留保が必要であるが、この点で注目されるのは、カーネ家の封建関係である。一一一六年、ジェラルド・カーネとグイド・カーネ及び彼らの共同領主が、チェッレ、フランネッロ等の集落に關して、ハインリヒ五世から裁判権 (*honor et districtus*) を承認されている文書があり、一二世紀初頭の段階では、カーネ家が近隣集落に裁判領主

としての地位を持つていることが分かる。しかし一方で、同じ文書からは、同時にこの裁判権が危機に曝されていたことも窺える。ハインリヒ五世は、「余の王国のいかなる地位の人物も、先述の共同領主とアリマンニを、脅かしたり悩ませたりすることがないように、彼らの農場を奪い取ったり、人身に手をかけるに及んだり、攻撃したりすることがないように、フォドウルムを徴収したり貢租を要求したり mansionaticum potestative を受け取ろうとしたりしないように」命じ、「共同領主とその相続者達を暴力によって自らの法廷に引き連れて行ったり、招いたりしようとすることを」禁じなければならなかったのである。<sup>⑩</sup>

カザーレとパチリアーノの紛争の指導層は、「騎士」という呼称を共有し地域社会において同等の社会的地位を持つ、在地の小貴族によって構成されていたと言える。一二七八年のカピターノ提出規約に見られたように、この時期には「騎士」と「ポロ」の二層が明確に区別されて意識されていた。合併後のカザーレは、その指導層である「騎士」創出の舞台となり、その下に一二世紀後半の発展があったと言えるのではないだろうか。

- ① CACC., I, n. 68, pp. 100-102. カザーレの指導層について、Ottone, P., op.cit. 参照。
- ② CACC., I, n. 58, pp. 81-90.
- ③ Archivio di Stato di Milano (以下 ASM), Pergamene per fondi (以下 P), cart. 313, n. 246.
- ④ CACC., I, n. 129, p. 240.
- ⑤ CACC., II, n. 373, p. 201.
- ⑥ CACC., II, n. 312, p. 113.
- ⑦ ASM, P., cart. 319, n. 11.
- ⑧ CACC., I, n. 135, pp. 243-244.
- ⑨ ASM, P., cart. 314, n. 11.
- ⑩ ASM, P., cart. 313, n. 246.
- ⑪ CACC., I, n. 85, p. 136.
- ⑫ CACC., I, n. 53, pp. 73-74.
- ⑬ CACC., I, n. 60, pp. 92-93.
- ⑭ I Biscioni I.n.374.p.284.
- ⑮ CACC., I, n. 85, p. 136.
- ⑯ CACC., I, n. 63, pp. 95-96.
- ⑰ CACC., I, n. 114, pp. 174-186.
- ⑱ 「騎士」という身分は、中北部イタリアにおいては「三世紀中葉ごろ」都市ローマの法制度や、封建法廷の内部で確立されるが、その過程には多くの曖昧な存在、とりわけ小騎士の存在が確認されている。Menant, F., *Gli scudieri («scutiferi»), vassalli rurali dell'Italia del nord nel XII secolo*, in: *Lombardia feudale. Studi*

sull'aristocrazia podana nei secoli X-XIII, Milano 1994, Barbero, A., Vassalli, nobili e cavalieri fra città e campagna. Un processo nella diocesi di Ivrea all'inizio del Duecento, in: 《*Studi medievali*》1992, pp. 619-644, イタリアにおける騎士研究の研究史に關して<sup>14</sup> Salvemini, G., *La dignità cavalleresca nel comune di Firenze e altri scritti*, cura di E. Sestan, Milano 1972, Cristiani, E., Sul valore politico del cavalerato nella Firenze dei secoli XIII e XIV, in: 《*Studi medievali*》, 1962, Gasparri, S., *I milites cittadini; studi sulla cavalleria in Italia*, 1992, Tabacco, G., Su nobiltà e cavalleria nel medioevo. Un ritorno a Marc Bloch?, in: 《*Rivista storica italiana*》91, 1979, pp. 5-25; ID, Nobiltà e potere ad Arezzo in età comunale, in: 《*Studi medievali*》1974, pp.

## おわりに

一三世紀における共同体の成長は、ヨーロッパ史を下から特徴づける現象の一つである。本稿においては、イタリアにおける同時期の農村部共同体間の紛争とその担い手の分析を通じて、その内容を具体的に示すことができたと思う。小教区共同体を超える活動範囲と利害関係を持つ小貴族である農村騎士が、地域社会の指導層として台頭し、旧来の所領構造の変化とそれによる共同体再編の中で展開した在地的な党派抗争の中で、集落の合併・拡大を指導し、共同体を再編成して行った。そして、イタリアの都市・農村関係の中でこのような過程を経た結果、高度な秩序創出機能を持った自治的農村部共同体が生まれたのである。このような共同体に国制上の地位を与え、その秩序の内部に組み込んでゆくのがルネサンス期地域国家である。その支柱の一つとしてのイタリア農村部共同体を、その形成過程において本稿は指摘し得たのではないだろうか。

以下では結びにかえて、このことをより一般的な水準での考察の中に位置付け、比較史的考察のための展望を得ること

1-24; ID, Nobili e cavalieri a Bologna e a Firenze fra XII e XIII secolo, in: 《*Studi medievali*》17, 1976, pp. 41-79, 拙稿「中世イタリアにおける領域構造論」及び都市―農村関係の課題」『史林』八二巻三号、一九九九年、一三二―一五一頁。

⑤ CACC., I, n. 85, p. 136; n. 88, p. 102; Pezzano, P., Istituzioni e ceti sociali in una comunità rurale: Racconigi nel XII e nel XIII secolo, in: BSBS, 1976.

⑥ ASM, P., cart. 319, n. 11.

⑦ CACC., I, n. 361, p. 183.

⑧ Pezzano, P., op.cit.

⑨ Carte Varie, n. 1, pp. 211-212.

を試みてみたい。上のようなカザーレの共同体形成・発展過程においては、中北部イタリアの固有性として、農村部共同体形成における教区共同体の重要性と、古代末期の都市と教会制度の關係に起因する都市の農村支配、それに由来する《準都市》の存在と都市間及び都市・農村間の抗争の大きな影響を指摘することが出来るだろう。換言すれば、カザーレの発展過程は都市・農村・教会關係の帰結なのである。

従ってここには比較都市史との接合の可能性が指摘され得るのである。従来、都市による農村支配領域Ⅱコンタードの存在はイタリア的固有性と考えられることが通例であつた。しかし近年は、領域支配を行う都市の事例はイタリア以外でも研究されている<sup>①</sup>。その支配形態と支配確立のプロセスの差異とともに、それと機を一にする農村内在地社会の発展過程を、在地指導層の特徴や在地紛争のメカニズムを含め総合的に検討し、多様な都市・農村關係を持つ諸地域の事例との比較を行うことが望まれると言えよう。またその際、差異のある諸地域間に共通の契機となり得ると思われるのは、所領の構造変化であろう。カザーレにおいても見られたような小教区共同体の発展は、北部イタリアでは一般に、人口の増大などの要因に加え、聖界の分散所領の解体に由来している。これはヨーロッパ各地の同様の過程のみならず、日本の大莊園の解体と再編とも同一の現象であると言ふことが出来るのではないだろうか。

これらの点を各地域の固有条件と併せ考察することで、在地社会論に基づく中近世領域国家論の比較史的展開が可能になるのではないだろうか。ささやかながら本稿はそのための素材を提供し得たものと思う。無論イタリア内部においてすら農村部共同体の類型は多様であり、一概に一般化することは不可能であるが、それらの在地社会論的比較考察を今後の課題として挙げ、本稿の結びとしたい。

① 山田雅彦「中世北フランスにおける都市付属領域の形成——アラスの事例を中心に——」『熊本大学文学部論叢』第七八号、二〇〇三年



government organization. The *zaichō-kanjin* system was thus fated for liquidation in the latter half of the 13<sup>th</sup> century due to this disruption of its foundations and the functions of the *kokuga* which had been supported by this system declined greatly. The character of the *kokuga* as a regional administrative organization lost its reality in this manner. When considering the assumption of the functions of the *kokuga* by the *bakufu* 幕府 in Kamakura times, it is necessary to consider the background of the loss of administrative capacity by the *kokuga* and hesitate before over-estimating any decisive actions on the part of the *bakufu*.

La formazione e lo sviluppo della comunità di una 《quasi-città》 nell'Italia settentrionale nel Medioevo : Casale Monferrato e i suoi conflitti locali.

by

SATO Hitomi

Nell'Italia settentrionale del periodo rinascimentale, numerose potenti comunità non cittadine chiamate 《quasi-città》 fecero la loro comparsa come soggetti politici caratterizzatori dell'ordinamento degli stati territoriali. Ma il fatto che tali comunità uscirono cresciute dopo una lunga fase di conflitti intercittadini nell'Italia comunale, durante la quale si erano verificate non poche modifiche insediative, richiederebbe una considerazione sul processo di formazione e di sviluppo di esse per inquadrare meglio dal basso la formazione dello stato territoriale. In questo saggio viene esaminata la formazione e lo sviluppo della comunità di Casale Monferrato, con una particolare attenzione alla sua capacità di mantenimento dell'ordine e della pace locale, che si vide crescere intorno alla metà del Duecento dopo una serie di conflitti locali.

Gli statuti della comunità e diversi documenti delle negoziazioni con delle comunità limitrofe e dei signori, i marchesi di Monferrato e i Visconti, mostrano tale capacità sempre più rafforzata mediante la creazione di un adeguato organo comunitario. Allo sviluppo di tale capacità precedette il processo di ingrandimento insediativo-comunitario di Casale che avvenne dopo l'unione con un'altra comunità rurale adiacente, Paciliano, con cui però Casale era da tempo coinvolta in conflitto connesso a quelli intercittadini. La crescita di questa comunità non cittadina capace di mantenere la pace poteva essersi verificata come una risposta all'esigenza di creare l'ordine al livello locale.

Il risultato dell'esame del processo dei conflitti e delle relazioni personali tra due comunità prima e dopo dell'unione sembra sostenere tale ipotesi : le due comunità avevano dei conflitti interni e le famiglie di loro esponenti erano legate le une alle altre dell'altra comunità, alcuni tra questi esponenti erano attivi in ambedue comunità sia come figure di importanza politica ed ecclesiastica che come proprietari terrieri, legati spesso all'interesse della chiesa di S.Evasio di Casale. La comunanza di interessi dei dirigenti delle due comunità in conflitto, che mostrano il profilo da aristocrazia rurale del luogo, sembra evidente.

Dai conflitti locali legati ai conflitti intercittadini del periodo comunale escono così piccoli aristocratici rurali del luogo come dirigenti delle comunità di rilievo ,ma non cittadina. La comunità rurale «quasi-città» è nata e cresciuta emergendo dal processo di riorganizzazione insediativa e sociale, determinato da un particolare rapporto tra la città e la campagna in conflitto nei secoli XII-XIII.

## Churches and Communities in Late Medieval Crete

by

TAKADA Ryota

As the result of the Fourth Crusade in 1204, the Republic of Venice took possession of the Island of Crete, where Venetian dominion continued for more than four and half centuries, until the Ottoman Empire conquered the Island in 1669. This paper aims at clarifying the social structure of Venetian Crete.

F. Thiriet, an authority on the history of Venetian Romania, proposed a social model for Crete in his monograph published in 1959. He proposed that there would have existed two secular ethnic communities, "Greeks" and "Latins," socially stratified and composed of communities of believers of two autonomous churches, the Orthodox Church and the Roman Catholic Church. In this paper I refer to a secular community of believers, as a "church community," and the framework of Thiriet's social model as the "church-community model."

Recently, some scholars have tried to revise his social model. Ch. Maltezou, for one, has criticized the theoretical framework of the church-community model. One of her objections has been that the church-community model lacks an understanding of the fact that both the Orthodox Church and the Roman Catholic Church came to enjoy autonomy as a result of the political process of the formation of the dual church